

サッカーにおける男女の偏見を減らすのに有効な方法は？

3年2組34番 三木綾音

Keyword: 「男女差別」「偏見」「スポーツ」「サッカー」「子供」

1. はじめに

多様性を大切にされている現代社会では、性別により決めつけをしたり偏見を持つのではなく違いを認めるべきだというふうに変化している。しかし、完全に考えを変えるのは難しく、無意識に発言してしまうことも多く、今でもそのような発言により不快な思いをした経験のある人は多くいると思う。例えば「女の子だから...」や「男の子はこれをしないといけない」など性別によって決めつけをする場面は多く見られると考える。また、私自身もこれまでサッカーなどのスポーツをする中でこのようなことを言われることが多くあったため、その経験を生かしてスポーツにおける偏見や差別に着目して探究を行うことにした。しかし、テーマが広すぎて自分にできることは少ないのではないかと思います、私自身、多くの偏見や差別を実際に感じていた女子サッカーに視点を向けて探究することにした。

2. 序論

この探究は「女子サッカーにおける偏見を減らすことによって少しでも多くの人が偏見や差別に悩まされることを減らす」というのを目的として行った。

そこで、私は「小学生くらいの男女を対象とするイベントを開催することで小学生には男女の偏見を植えつけられることを防ぐことができ、またその様子を見た大人たちにも今の時代についての理解が深まるのではないか」という問いを立てて探究することにした。

スポーツにおける性別に対する問題は幅広く多くの種類があり、例えば「NCAAバスケットボール・トーナメントにおける女子選手と男子選手の待遇の不公平が明らかになった。スポーツにおける性差別は、子どもたちがスポーツ少年団に所属しているときから根付いているようだ。」(ステイシー・デ・アルマス/2021年3月)のような待遇の差についてや、「サッカーの女子ワールドカップの賞金総額は、前回大会の4倍に近い1億1000万ドル(約154億円)に引き上げられた。だが、男子ワールドカップの4分の1に過ぎず、国際サッカー連盟は27年の大会で男女同額を目指すという。」(毎日新聞/2023年8月7日)このようにまだまだ多くの差別や格差が残っていて改善をしている最中である。また、これらは子どもの時から根付いてしまっているという考えもある。

女子サッカーは社会生活において男女格差が大きかったころ、サッカーは男性がするものという考えが根強かった。その影響が大きく、女子サッカーの発足が遅れて今でもサッカーは男性がするものという考えが残っているのが現状である。それを改善するために今まで取り組まれてきたこととして、日本サッカー協会(JFA)によってJFA女子サッカーデーを定め、各都道府県で女子サッカーの普及をテーマとしてイベントが開催されている。また、JFA女子サッカーデーには「世界でいちばんフェアな国になろう」というスローガンもあり、誰もがフェアに輝ける社会、夢に向かってチャレンジできる社会をスポーツ、サッカーで実現していこうという決意が込められている。また、それ以外の場でも各都道府県がイベントなどを開催し、女子サッカーの人口を増やそうという取り組みが行われている。

3. 本論

実際に行動に移すのに何をすべきか考えたところ、まずは問いにもあるように小学生対象のイベントを開催することにした。しかし、従来のJFAの活動のようなものをそのまま行うだけでは今までと同じことを繰り返すだけでわざわざ私が行う意味がないのではないかと考え、これまでの取り組みについて知ることから始めることにした。JFAの取り組みを調べてみたところ、JFAのイベン

トでは事前申し込みが必要であり、女の子に限定しているイベントが多いことがわかった。そこで私は二点、従来とは大きく違う点を作ってイベントを開催することにした。一つ目は、従来の取り組みでは申し込みが必要なため初心者などにとっては参加するのに少し勇気が必要なのではないかと考え、主催者が自ら向かい、参加の申し込みなどが不要で誰でも参加できるイベントを開催することにした。そして二つめは、対象を女子に限定するのではなく男女混合で行うこととした。そうすることによって、対象に経験の有無で極端な差が出ず自然な状態にできるうえ、あえて男女混合にすることで児童に男女の壁を感じさせないようにした。

イベントでの活動内容を考えるにあたって、京都の学校で同じような目的で探究している高校生のイベントに参加させて頂いた。そこでは実際に参加させていただく以外にも初心者でも楽しめる内容などを話し合い、イベント開催にあたって必要な情報を得ることができた。そこで学んだことを踏まえて、対象の小学生でも楽しめる内容を実施することとした。初心者の小学生でも簡単に楽しくできることとして、普段の遊びを延長したものとしてボールを扱ってみることを考えた。例えば鬼ごっこや手を使うボール遊びの延長として足でもボールを触ってみるなどの内容である。また、私の探究では対象が小学生でありピュアな心を持っていると考え、事前に探究内容を知らせるのではなく、自然な様子を観察することとした。

イベントの開催地については同じゼミで地域との関わりについて探究しているファミリーの小学生との交流の場(とみっこ)を借り、登美ヶ丘小学校の児童に協力していただいた。この交流の場には2回参加させていただき、1回目は様子を見て雰囲気の把握を、2回目はイベントを開催する計画にした。しかし、お借りした場が自由度の高い場であり、かつ私の小学生たちをまとめる力が不足していたため、イベントの開催まで至ることが出来なかった。しかし、男女混合でサッカーをしている集団が見られたことから、小学生たちはもともと偏見や差別意識を持っていないのではないかと考えられた。

4. 結論

今回の探究でイベントの開催まで至らなかったものの、小学生の中ではもともと偏見や差別意識は持っていないのではないかと仮説を立てることができた。しかし、仮説で止まっている上に、大人に関しての意識調査を行えなかったため大人に関しては問いのままで止まってしまうのが今の大きな課題であると考え。また、小学生に対しても考察で止まってしまうため、今後は確信に変える必要があると考える。

5. おわりに

私はもともと論文を読むのはあまり好まなかったし、堅苦しい探究もしたくないという思いが強かった。しかし、自分の好きなものに着目し探究を進めていくうちに高校生でも世の中のためにできることに気づき、楽しくなった。このように思えたのはこの探究のおかげであると考え。また何事もはじめてみるのが大切だと気づかされた。

6. 参考文献・出典

「JFA女子サッカーデー2025の取り組みについて」『日本サッカー協会』

<https://www.jfa.jp/women/news/00034836/> 2025年2月28日

ステイシー・デ・アルマス「異なる競技場でスポーツにおけるジェンダー平等の事例」『Nielsen』

<https://www.nielsen.com/ja/insights/2021/on-different-playing-fields-the-case-for-gender-equity-in-sports/> 2021年3月

「スポーツ界の男女格差 平等な競技環境を整えたい」『毎日新聞(東京朝刊)』

<https://mainichi.jp/articles/20230807/ddm/005/070/017000c> 2023年8月7日